

# 現代のことは



こはら  
小原 克博

図書室はもともと整理整頓がなされている場所であるべきだが、現実には、分類困難なものが段ボール箱や棚の奥に押し込まれている場合がある。私が管理責任を負っていた図書室にも、貴重な本や物品を大事にしまひ込み、結果的に何があるのかよくわからなくなっていた一角があった。最近、その場所を整理しているさなか、偶然、踏み絵が二つ見つかった。

それが本物かどうかは判断のしようもなかったが、踏み絵の裏側には「寛文九年」の作とあ

る。西曆に直すと一六六九年である。年配の方々に聞いても、誰一人はつきりとした情報を持ち合わせていなかった。その踏み絵は、長年にわたって人目に触れることなく、しまひ込まれていたことは間違いない。

すり減った表面に、十字架とマリアの像をおぼるげに確認することができた。キリシタン弾圧の際、実際に使われたものなのだろうか、などと、素人じみた想像をめぐらしつつも、その真贋を見極め、ルーツを突き止

## 踏み絵騒動

めたいという欲求に駆られた。聖杯伝説の謎を解く「ダ・ヴィンチ・コード」さながらのミステリーの幕開けである。

その踏み絵は誰よって入手されたのか。その謎を解くための文献的史料は現存しないが、類推することはできた。二十世紀初頭、同志社大学で教鞭を執ったギューリック宣教師が宗教博物館の設立を構想していたとの記録が残っており、実際、彼はいくつかの品を収集していたようである。明治時代、長崎の宣教師と同志社の宣教師は交流を持っていたので、ギューリックがそのルートから踏み絵を入手したことは十分に考えられる。

しかし、なお残る根本的な疑問は、そもそも、その踏み絵は本物なのか、複製品なのか、と

いうことであった。実は、一つの踏み絵の裏側には先の制作年だけでなく「禁複製」の文字が刻まれていた。「禁複製」の刻印をもつものが複製品だとしたら、これほど皮肉なブラック・ジョークはない。本物であってほしいという、ほのかな期待と一抹の不安を抱えながら、この分野の専門家に鑑定を依頼することにした。

その専門家によれば、現存する、ごくわずかの真正の踏み絵は重要文化財として保管されており、もし新しいものが発見されたとすれば大事件だという。私の期待は一気に揺らいだが、結論を出すために必要な調査の数日を待った。結論は、複製品であった。明治のロマン派の文人たちにとって、虐げられたキリシタンが格好の文学の題材と

なり、当時、キリシタン・ブームを巻き起こした結果、長崎・天草を訪ねる観光客のために踏み絵等、多くの偽物が製造されたいらしい。私が手にしたもの、その一つであった。

踏み絵のミステリーは、あっけなく幕を閉じた。しかし、江戸時代から明治時代にかけての日本史の断面を垣間見ることができたのは貴重な経験であった。思想信条の違いが人の命をいとも簡単に奪ってきた歴史をわが国も持っている。そうした歴史の事実に向き合わずに「日本は寛容な国である」という思い込みを複製することなかれと、「禁複製」の刻印はささやいているかのようであった。(同志社大教授・キリスト教思想)